

# Kishinkyō Letter

一般財団法人 機械振興協会 会報

## CONTENTS

【TOPICS】くるまコレクションの近況……p1-3

【技術研究所より】機械産業の発展に向けて……p4

2024年秋号

No.17

### TOPICS

## 「くるまコレクション」の今、 BICライブラリからお伝えします！

2023年の秋、機械産業の専門図書館「BICライブラリ」に新しいコレクションが追加されました。その名も「くるまコレクション」。2023年3月をもって歴史を閉じた「自動車図書館」（日本自動車工業会）の蔵書類をBICライブラリが引き継ぎ、新たに誕生したコレクションです。同年8月に受入作業を始めて以降、目まぐるしい日々を送っていましたが、だんだんとその作業も落ち着き始めました（引っ越しの様子や詳しい経緯は当会報No.13をぜひご覧ください）。今回は、くるまコレクションを公開したBICライブラリのその後の様子を図書館職員からお伝えします。



### ● 自動車図書館からの資料について

自動車図書館から譲り受けた資料は、自動車会社の社史、自動車工学の専門書、世界中の自動車のカタログ、モーターショーの報道資料など自動車に関するあらゆる資料があります。その中でも利用の多いおすすめ資料を3つご紹介いたします。

初めに、「中尾文庫」です。三菱自動車工業の元常務取締役であり、長年にわたり自動車研究に携われた中尾充夫氏が収集したコレクションを保管しています。戦

前の自動車史に関する資料のほか、昔の自動車会社の案内や新聞・雑誌記事を切り抜いた100冊にのぼるスクラップブックもあります。

次に、自動車のカタログです。これらは自動車を販売するときに、車のデザインや性能を魅力的に伝えるため自動車メーカーが作成するパンフレットです。くるまコレクションでは1962年から2019年までの自動車のカタログを所蔵しております。書庫整理時に家族が乗っていた「トヨタ ソアラ」、「トヨタ AE86」を見つけることができま

## 「くるまコレクション」の今、BICライブラリからお伝えします！

した。みなさんもくるまコレクションをのぞいてみて下さい。思い出のクルマや、あこがれのクルマがきっと見つかるはずです。

自動車図書館からは雑誌も譲り受けています。問い合わせの多い「CAR GRAPHIC」「モーターファン」、専門誌の「バスラマ」(バスの専門誌)や「911 DAYS」(ポルシェ専門誌)、「モーターサイクリスト」(バイク専門誌)など、専門誌から調査レポートまであらゆる自動車関連の雑誌を継続して収集しています。

### ● 3年ぶりの公開、 賑わうBICライブラリ

くるまコレクションの公開日には自動車図書館の資料を待ちわびていた多くの方に来ていただきました。自動車図書館は2020年から新型コロナウイルスの影響により休館していたため、約3年ぶりの資料公開となったからです。朝から図書館の入り口で開館を待つ姿や通常の3倍近くの来館者が訪れる館内の様子に、職員全員とても驚いた一日となりました。現在も来館する約半数の方がくるまコレクションの資料を利用しており、利用者層の変化を日々感じています。来館の目的は様々ありますが、主に調査と趣味の目的で来館されることが多いです。

### ● 自動車の問い合わせが 半数を占める様に

調査目的の方が利用される資料の多くは、最新の動向が探れる調査レポートや統計誌、会社の社史などです。調査レポートや統計誌は自動車メーカーの方や新規ビジネスとして参入を検討する方が、最新のデータを得るために利用しています。社史は自社のアーカイブ資料として情報収集される方や、記者の方が新聞記事作成のために利用するといったケースがあります。

自動車図書館の休館中、資料の収集が止まっていた資料もいくつかありましたが、BICライブラリの所蔵資料で代用できることが多いです。このような親和性の高さも機械産業とビジネスの専門図書館であるBICライブラリで自動車図書館の資料を引き継いで良かったことのひとつです。

調査目的で利用される方からはレファレンス（調査依頼）のお問い合わせも多くあります。くるまコレクションが増えたことで、その内容も変化しています。もともと、機械振興協会は中小企業支援を掲げており、BICライブラリではその活動の中で積極的にレファレンスサービスを行っております。以前は、「ねじ」の製造数や工作機械のメーカーシェアを知るための調査など、ものづくり全般にまつわる調査依頼が多い傾向にありました。くるまコレクションを受け継いだ後は、自動車にかかわる調査依頼が全体の半分を占めるようになりました。レファレンスの事例として、「海外の自動車動向を探るため、市場動向がわかる資料を探している」や、「自動車部品のeアスクルについて調べたい」などの市場調査の依頼のほかに、「自動車関連の会社・団体について、当時の活動内容がわかる資料を探している」という歴史的な調査などがあります。問い合わせは研究者だけでなく、多様な業種の方から調査依頼を受けます。また、国内だけでなく海外の大学研究員の方から古い自動車統計についての問合せを受けたこともあります。英語でのお問い合わせに四苦八苦しながら回答をしていますが、対応する利



よく使われる調査資料たち

用者の幅の広がりを実感します。1台の自動車を作るために、約3万個の部品が必要と言われているので、それだけ関わる産業も広いのだということを改めて感じさせられます。

### ● 小さな利用者の来館も

趣味目的の利用には、過去に自動車会社に勤務しており、慣れ親しんだ車を眺めたいという方や、自動車のプラモデル制作のために車内の写真を探している方がいらっしやいます。特に、自動車のカタログ資料をお求めの方も多く、夏休み期間には古い自動車ファンの小学生の利用者にも来ていただきました。今までBICライブラリでは、社会人・大学生の利用がほとんどで、高校生以下の利用は少なかったのですが、「自動車」というテーマだけに、年齢問わず資料が求められていると感じます。保護者の方とともにご案内をしていたところ、「『2599年紙上モーター展』という本があるが、この2599年はどこから来ているのか」という質問がありました。資料は昭和14年の発行で、戦争の影響から西暦ではなく、神武天皇即位紀元が使われていることが分かりましたが、このような世情が読み取れる資料もBICライブラリではあまり所蔵していなかった資料のひとつです。古い資料も新しい資料と同じように関心を集める自動車コンテンツの魅力にも日々驚かされています。

くるまコレクションの公開から1年、自動車図書館を利用していただき喜んでいただく一方で、見えてきた課題もあります。例えば、収集しなければならない資料の種類や数が増えたことによる資料費の獲得、資料の保存方法などです。

現在、くるまコレクションの資料の多くは出版社や著者の方から寄贈の申し出をいただくことで、成り立っています。この場を借りてご寄贈いただいている出版社さま、



「2599年紙上モーター展」

著者の皆さまに改めてお礼申し上げます。これからも、BICライブラリを訪れる利用者の皆さまにお役立ていただけるよう、収集・保存業務に励んでまいります。ひきつづき、くるまコレクション、機械産業とビジネスの専門図書館としてご来館をお待ちしています!

### ● 利用方法について

BICライブラリはどなたでもご利用いただける図書館です。東京タワーの向かい、機械振興会館の地下1階にあります。2022年から、より多くの方に利用いただけるよう有償の会員制度を廃止し、個人向けの会員サービスを始めました（無償）。会員の方はBICライブラリの資料を借りることができます。もちろん、くるまコレクションの資料も貸出可能です（複写禁止・貴重資料を除く）。また、今年度から開館日を拡大し、毎月第3土曜日をオープンデーとして開館しています。平日同様に資料の閲覧や貸出サービスを受けることができますので、お休みの際や東京タワー観光のついでに、お気軽にお越しいただければと思います。



《開館時間》 月～金 10:00～17:00 (16:30入館受付終了)  
※毎月第3土曜日開館  
《休館日》 土曜・日曜・祝祭日、年末年始、毎月最終金曜日  
※変更の際はホームページにてお知らせいたします。

ごあいさつ

## 機械産業の発展に向けて

一般財団法人機械振興協会副会長・技術研究所長 西本 淳哉



本年7月に機械振興協会副会長・技術研究所長を拝命いたしました。どうぞよろしく願いいたします。これまで計測制御関係企業の研究開発担当役員として約10年勤めました。

それまで経済産業省で32年間、電子機器産業、航空宇宙産業、公益事業政策、輸入政策、地域政策、環境政策などに従事し、経産省全体の産業技術政策のとりまとめを担当しました。内閣府の初代宇宙審議官・宇宙戦略室長を務めるなど、官民併せて、一貫して産業技術政策に従事してまいりました。

半導体、車、家電などあらゆる製造業で圧倒的な国際競争力を誇った時代から、近年はインターネット、5G、AIなどデジタル技術で後塵を拝し、現在、日本の国際競争力は世界第38位とされています。(IMDレポート)

海外展開によって世界で活躍している企業はさておき(といってもこちら厳しい競争環境にさらされています)、ものづくりの根幹を支える中堅中小企業は人材確保、技術の継承、後継者難など、さまざまな課題に晒されています。しかしながら、これら中堅中小のものづくり企業が日本の技術力を支えているのです。有力なアセンブリ企業もこれらの企業群の支えがなければ世界から評価される高品質を維持し続けることはできません。国際情勢の影響もあり、近年は国内回帰の動きが見えます。これを機会に、国

内にしっかりした研究開発拠点やマザー工場の機能を残し、ここを拠点にイノベーションを生み出さなければなりません。

機械振興協会は昭和39年設立以来、日本の機械産業を支えてきています。様々な材料の加工状態をデータベース化した加工技術データファイルや、研磨に匹敵するような超精密な切削加工技術の開発、高精度な計測技術などはものづくりの基盤です。現在サービスを停止していますが、このようなものづくりの基盤は公的な機関が提供し続けていかなければなりません。

DX関係では、複数メーカーのロボットや工作機械をネットワークでつなぐミドルウェアORiN (Open Resource interface for the Network)の開発に協力しました。現在、ORiNは国内外で87,000件をライセンスしています。

また、製造業の生産管理手法を農業に適用することで生産性を向上させる取り組みや、中堅中小の食品加工工場の自動化を専門家チームが一丸となって支援する取り組みなどを進めています。これらによってロボットの導入拡大やDXの社会実装拡大につながればと思います。

機械振興協会は今後とも関係の方々とは密接に連携し、機械産業振興の結節点として、日本のものづくり力の強化に努めてまいります。